

## 短編小説の美学（後編）

三 輪 誠 一

5

先に長編小説と短編小説というジャンルについて諸作家の見解を述べたが、これと関連して H. James の見解について簡単な検討を試みたい。James は短編小説について彼独自の意見をもっていた。彼は長編小説というジャンルに属さない彼の他の作品をすべて tale と称する。この種の彼の作品は合計112編の多数にのぼる。彼の tale を一覧すると、その形式は長短様々なものを含んでいる。短編の形式についての一般の通念は、一編の作品に含まれた語数が1万語以下で語られる作品とされている。しかし James の tale の中には3万ないし4万を超えるものが相当数ある。例をあげれば“Madame de Mauves”は33,000語、“The Turn of the Screw”は44,500語より成る作品である。

（*Technique in the Tales of Henry James.* by Krishna Vaid. より引用）

わが国の短編小説の通念からみると、これはいわゆる中編小説に相当するものである。英米の批評家の多くは、この種の作品を long short-story, short novel, あるいは novella 等、各人各様の名をもって呼ぶ。James は彼の tale の中である語数を超えたものを、フランス文学で用いられる語を借用して“nouvelle”と呼び、この形式の作品に大きな関心を寄せる。短編小説は一般に定期的刊行物、雑誌等にまず掲載されるのが作家の作品発表の習慣であり、雑誌編集者は作者に対して6,000~8,000語より成る短編小説を要求する。James はこの要求に対して強い不満の言葉もらしている。編集者の常識は5万語の作品はもはや短編ではなく長編小説であると考え、James はこれに反論して、順当に展開した主題は編集者の要求するきびしい規則——作品の長さを6,000語ないし8,000語に制限する規則——の下で衰弱

してゆき、ついに死滅に至る。」と言う。（the idea happily developed, languished, to extinction, under the hard-and-fast rule of the “from six to eight thousand words”）James の tale の中で語数6,000~8,000という作品はきわめて少ない。大半の作品は1万語を超え、それらの中には語数3万ないし4万以上の作品もある。（Leon Edel は“The Turn of the Screw”の語数を53,000語と計算している。）James は nouvelle という形式が彼の主題を作品化する場合、彼の創作経験からみて絶対に必要な作品の規模であると信じ、これを強硬に主張する。この主張を裏づけるためにヨーロッパ諸国の作家たち、Turgenieff, Balzac, Maupassant, Bourge の作品を好例としてあげ、これを“this fine type”と称し、この伝統が英米文学にないことを遺憾としている。彼は nouvelle という形式を賛美して“the beautiful and blest nouvelle”, “the possible neatness of the nouvelle”と呼び、そのための作家の創作努力を“the effort to do the complicated thing with a strong brevity and lucidity”と言う。かくして創作された彼の作品の特質、“frugal splendour, ideal of economy”が彼の“nouvelle”の美学の根幹であると彼は力説する。

James の読者の周知するように、彼の作品制作の端緒となったもの、作品のテーマの着想の契機（James の言葉を借りるならば作品の germ）について彼はしばしば語っている。（New York Edition 各巻の序文）彼の日常生活における交友やそれを通じての彼の見聞は、彼の作家活動において各種の作品のテーマを着想する機会を彼に与える。これによって彼はあるテーマとそれを作品化する題材を脳裡に描いて創作ノートに記録する。これを彼は anecdote と名づける。これは彼の tale の原型である。この原型を彼は次のように定義する。“The anecdote consists, ever of

something that has oddly happened to some one, and the first of its duties is to point directly to the person whom it so distinguishes.”

彼はテーマと anecdote は統合され、作品の中で具体化され、concise anecdote、すなわち単純簡潔な tale として完成される場合と、そのテーマがさらに大きく発展する要求や可能性を示すに至る場合の二つがあることを、彼の創作体験として語っている。彼はこの二つの場合のうち、前者のテーマを anecdotic idea、後者のテーマを developmental idea と名づける。後者の場合、作品の内容と形式は増大して nouvelle となり、時には novel となる可能性さえも生じる。(James はこの予想外の作品規模の増大は作品執筆開始の後に生ずるのであって、あらかじめ確実に予想し得るものではないという。) James の tale の長さは平均1万語ないし2万語であり、雑誌編集者の通念としての短編小説の規模を逸脱して、大半は彼の名づける“novelle”に属するものとなる。これらは彼の言う developmental idea の具体化された作品群である。それはテーマの複雑性をいかにして簡潔明確に作品化するかという問題に対する彼の作家としての解答である。次に私は James の nouvelle の一例を“Louisa Pallant”によって検討したい。これは1888年の創作であり、われわれの通念としては中編小説とみなして差つかえないと思う。作品が含む語数は約14,500である。

( Krishna Vaid の著書による。)

6

“Louisa Pallant”は中年、独身のアメリカ人が語り手となって一人称で語る物語である。小説の主人公はこの物語を語る「私」ではなく、題名の示す中年の未亡人、Louisa Pallant である。主要登場人物は Louisa およびその娘 Linda、「私」の妹であり、同じく未亡人の Mrs. Charlotte Parker および彼女の一人息子、Archie Parker である。物語はまず語り手の短い独白によって始まる。“Never say you know the last word about any human heart! I was once treated to a revelation which startled and touched me in the nature of a person with whom I had been

acquainted ……for years, whose character I had had good reasons……to appreciate and in regard to whom I flattered myself I had nothing more to learn.”(大意——いかなる人物であろうと、その心理や性格について結論的判断を下してはならない。私はすでに久しく知っていたある人物の性格について、私をいたく驚かせた意外の事実を経験したことがある。実は私にはその人物の性格を理解するのに十分な理由があり、その上その人物についての私の認識はすでに完全であると私はひそかに信じていたのであった。)以上がこの小説の発端の数行である。これはまずこの小説の中心テーマを暗示する前置きである。物語はドイツの温泉地、Homburg の町を背景として始まる。語り手は、ヨーロッパの各地をめぐり歩く旅行の途中、Homburg に立寄る。季節は7月の終りのある夕暮、町の盛り場で「私」は旧知の Louisa に約10年振りて偶然に出会う。Louisa は彼女の一人娘 Linda を同伴している。Linda の美しい容姿は夏の夕暮の多数の散策者の注目を引く。「私」もまた10年前にはまだ幼い少女であった Linda が、かほどに美しい女性に成長したのを見て一驚する。ここで約20年の昔の「私」と Louisa との関係が「私」の回想によって読者に知らされる。すでに遠い過去となった語り手の青春時代、「私」は Louisa を深く愛して求婚したが、「私」の求愛は拒否される。Louisa の結婚の理想は現世の名利を熱望する野心であることを知らされて「私」は深く失望する。「私」が中年の現在に至るまで、なお独身が続ける主要な理由のひとつは、この時の失意の痛手である。しかしその昔の彼女に対する未練や怒りや怨恨の感情は、今の「私」からは完全に消え去り、その後、稀に彼女を見る機会があっても、「私」はきわめて冷静な心境で彼女と相向うことのできる中年に達している。冷酷な打算によって「私」を棄て、彼女の望む結婚に成功した Louisa は、その後夫と死別し、今は一人娘の Linda の結婚相手をさがしながらアメリカからヨーロッパに渡り、各地を巡遊している。これが Louisa 母子の現況である。ここでもう一人の人物が新しく登場し、物語は興味ある事件へと発展し、「私」は Louisa の内部に新しく異常なものを発見し、物語は終局に向って急速に前進す

る。二人の偶然のめぐりあいの後まもなく、「私」の妹 Mrs. Parker の息子、Archie は、ヨーロッパ文化の美点を息子に学ばせたいという母親の希望に従ってヨーロッパ見学に渡来し、Homburg で伯父の「私」と落ち合う。「私」は妹の Mrs. Parker からヨーロッパ旅行における息子の世話を宜しくと依頼されている。

伯父と甥の兩名、Louisa 母子の間に外地の旅先での短い期間ではあるが、多少変わった両家の交際が始まる。自然の成行きではあるが、若い Archie と Linda との間に、第三者からみると恋愛感情らしいものが生まれ、それはやがて若い二人の結婚の段階へ進む可能性を読者に暗示する。しかしまもなく Louisa 母子は突然に Homburg を去り、イタリア北部の風光美しい観光地、Maggiore 湖畔の町 Baveno に移り、ここにしばらく滞在することになる。これを知って「私」と Archie は彼らのあとを追うように同じ湖畔の Stresa に到着し、ここから小舟に乗って Baveno におもむき、Louisa 母子に再会する。Archie は Linda を小舟に乗せて湖上に遊びに出かけ、一方「私」と Louisa は湖畔のホテルで対談する。「私」は Homburg で成人した Linda を見た時以来、彼女の美しさと賢明さのみならず、彼女の純真明朗な性格にひそかに賛嘆、敬服の念を抱いていたのであるが、この時「私」は夢想さえしなかった異常な話を Louisa から聞く。それは今日に至るまでの Louisa の身の上の回想談というよりは、全く意外な Louisa の告白であり、同時に恐しい警告であった。「私」を棄てて選んだ彼女の人生の過去をかえりみる時、彼女は烈しい良心の呵責と悔恨の痛苦に耐えないと告白する。さらに「私」を驚かせたのは、彼女の娘 Linda の内部には、若い日の Louisa が抱いた欲望以上の恐るべき野心がひそんでいることを告げる彼女の言葉である。Linda の美しい仮面の裏には、恐しい悪魔の魂が隠れているというのは、Louisa のみが知っている厳然たる事実であり、Linda と結婚する男性の運命は破滅であるという。その告白は Louisa が過去において「私」に対して犯した罪の償いであり、純情の青年 Archie を未来の不幸から救うためであると語る。さらに Louisa は悲痛な叫びを発する。“My only child is my punishment, my

only child is my stigma!” と叫ぶ。

両者のこの対話は物語のクライマックスである。この秘密の告白は、Louisa の内部の暗い世界、彼女の異常な野心によって意図的に育てられた娘 Linda の奇怪な二重人格像を提示する。それは息づまる劇的な映像を読者の前に現出する。これを頂点として物語は急速に終局に向う。

翌日「私」が Louisa に会った時、彼女は Linda に関するすべての真実を Archie に説き明し Linda との結婚の希望を断念させた経過を簡単に「私」に告げる。Louisa と「私」との最後の対話は、次のように終る。

For a moment she said nothing, only looking at me, Then at last;

“I told him the truth,”

“The truth?”

“Take him away —Take him away!” she broke out. “That is why I got rid of Linda, to tell you, you must not stay—you must leave Stresa tommorrow,……”

she smiled strangely,

“Don't be afraid, don't be afraid, We will break camp tomorrow——”

これによって「私」の旅先で遭遇した奇妙な事件は幕を閉じる。これは Louisa 母子と「私」との永久の別れである。James はこの物語の終りに短い後日談をつけ加えている。「私」はこの事件の一年後 Linda がロンドンで大富豪の後継者の青年と結婚したことを知る。次にこの後日談の原文を引用する。

I've never again seen the wronger of my youth. About a year after our more recent adventure her daughter Linda married, in London, a young Englishman, the heir to a large fortune, a fortune acquired by his father in some prosaic but flourishing industry.……I am convinced her mother was sincere.

次に引用するのは、「私」が甥 Archie と共にヨーロッパで経験した事実を、妹の Mrs. Parker に話した時、妹の示した反応を語る部分である。これは物語の末尾の最後の3行である。

I put before her as soon as I next saw her the incidents here recorded, and——such is the

inconsequence of women—nothing can exceed her reprobation of Louisa Pallant.

語り手の「私」はここで Louisa に対する Archie の母親の非難がいかにかつ烈しかったかを述べて物語を結んだのである。語り手のこの感想は、Louisa や Mrs. Parker を通じて見た女性心理の不可解さの表白と考えることができよう。しかしこの作品の中心は物語の主要人物 Louisa の行動であり、彼女の謎のような人間像である。James の作品には ambiguity (あいまいさ) があるとよく言われるが、“Louisa Pallant” もまた多分の ambiguity を含み、これが批評家たちの注意を引き、いくつかの相異なる解釈が生ずることになる。というのはこの作品を Louisa の罪の償いの物語と考えるとこの作品は通俗的な単なる教訓的物語となる恐れがあるからである。語り手はこの小説の末尾において “I am convinced her mother [Louisa] was sincere.” と言っているが、これを Louisa の行動に対する作者 James の裁断と考えてはならぬと論ずるのは、批評家 Walter Wright である。Wright は語り手は必ずしも作者の側に立っているのではなく、Louisa は生来の容疑者となり得る資格をもつ性格者とみることもできるし、あるいは欺まんとして偽りの誠実と正真の誠実との混合した性格所有者である可能性も考えられると言う。作者は人間性の内部の複雑さを探索しながら、探索の彼方になお多くの不可解なものがあると暗示したのであろうと彼は推則的判断を下す。Granville Jones の批評は次のような解釈をする。Louisa は Archie の未来に起り得る不幸な運命を未然に防ぎ、同時に Linda の野心、すなわち富豪との結婚を成就させることによって彼女の二つの希望を実現する満足を求めたのである。このような仮定を根拠として Louisa が巧妙な虚言家であることを推論することも可能であるというのが、Jones の解釈である。

次に読者は “Louisa Pallant” を読んでどんな印象を受けるかということについて、Wright は簡単ではあるが、興味ある調査結果を報告しているので次に参考までに紹介する。これは大学の教室で大学生について調べたものである。Classroom experience reveals that numerous readers concur with the sister: others accept

Louisa's words without question. もう一つの参考資料として James 創作ノートの中にこの作品の執筆前に彼が記録したメモがあり、彼の創作意図のアウトラインをうかがわせるものであるので、その一部分を次に抜粋する。——the mother, who has some principle of goodness still left in her composition, is appalled at her own work.

She sees the daughter, so hard, so cruelly ambitious, so bent on making a great marriage, and a great success at any price, that she is almost afraid of her. She repents of what she has done—She is ashamed.

James の創作メモとそれによって完成された作品との間には、創作の過程の中で、修正や変更を受けた部分がある。予定のプランと完成後の作品との間に大小の相異のあることは、いかなる作家の場合にも珍しいことではない。“Louisa Pallant” においても、ある部分においては大きな変更が行われている。しかし上記のメモの抜粋部分はこの作品のテーマの重要部分であり、上記の部分に関する限り、完成作品においても予定のプランはそのまま実行されている。

“Louisa Pallant” 以外にも、James の諸作品には批評家の指摘する ambiguity が各所に見出される。しかしこの ambiguity は、彼の作品を味読することによってむしろ特殊な興味を読者に与えるものと信ずる。“Louisa Pallant” はプロットの構成の精妙さ、作品の物語性 (narrative value)、各人各説の解釈の幅の広さによって James の nouvelle 中の代表作の一つといえることができよう。

7

予定では James の tale を “Louisa Pallant” のほかにさらに 2 編と、このほかに別の短編作家の作品の若干を取上げ、比較検討して短編小説の美学を論ずるつもりであったが、時間的余裕と準備の不足で James の作品一つと彼の nouvelle 論の概略の紹介に終わった。他日機会があれば、もう少し精密な短編小論を試みたく思う。

(昭和57年10月30日)

### Bibliography

Edel, Leon. *Henry James, A Collection of Critical Essays*. 1963.

Jones, Granville. *Henry James's Psychology of Experience*. 1975.

Miller, J. E. Jr. *Theory of Fiction: Henry James*. 1972.

Vaid, K. B. *Technique in the Tales of Henry James*. 1964.

Wright, W. F. *The Madness of Art*. 1962.

#### Texts

*The Short Stories of Henry James*. ed. Clifton Fadiman. Modern Library. 1945.

*The Art of the Novel* (H. James's Critical Prefaces) . ed. R. P. Blackmur. 1934.

*The Notebooks of Henry James*. eds. F. O. Matthiessen and K. B. Murdock. 1947.